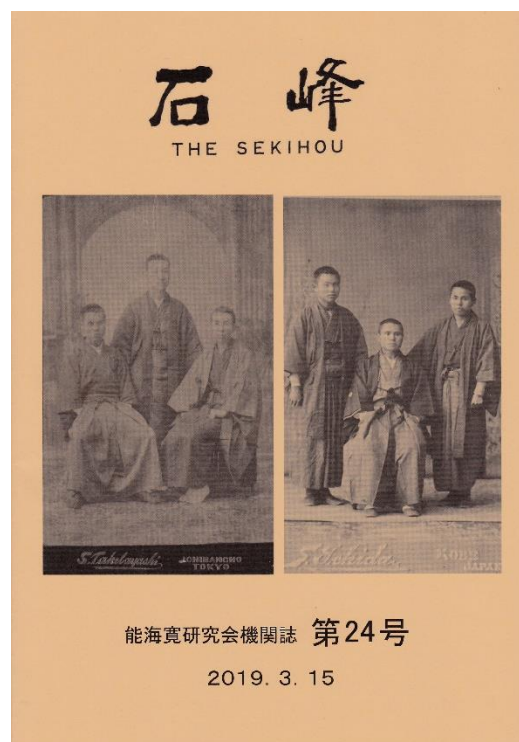


「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯

タイトル	「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』 ISSN 1883-4183
号	第 24 号
ページ	82-90
発行年	2019.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)



水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯

能海寛研究会員 隅 田 正 三

はじめに

大正6年(1917)に刊行された『能海寛遺稿』に寄稿された「能海寛君略伝」南条文雄記によると、能海寛の探検行は、明治19年に発願したことが記されている。

このことは、明治19年(1886)10月23日、京都普通教校西寮にて、同窓生10数名で、各々の将来の宿望を発表する場で、能海は、チベット探検行を公言して、友人らを驚かせた。その時の状況を表すものに、「活眼」という記録物が残っている。

この記録物『活眼』を書いて、能海にて渡したのが西寮2号室同室の蚊野遷次郎であった。文面に、「活眼ヲ開テ君ガ成業ヲ待ツ勉メヨヤ、勉メヨヤ」とある。この時の日付、時刻まで書き込んでいる。

21年4月8日に英文会(E.C.S)を組織し、機関誌『NEW BUDDHIST』(新仏教徒)を同年10月14日から毎週日曜日に発行して31号まで、継続した。英文会を前田得念、河野始治に委譲して、22年12月、東京へ上京した。

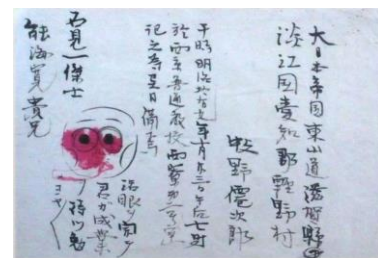
23年1月、能海は慶應義塾へ入学、東京版の英文会を立ち上げ、『Wisddom and Mercy』(智慧と慈悲)という月刊誌を発行した。一時は、古河勇と『木石書院』と名付けて、龍源寺で同居自炊生活をして、新仏教徒運動を模索し、普通教校出身者で経緯同盟会を組織した。能海は、6月1日より友人の白山謙致宅の西蓮寺へ転居した。そこで、「土曜会」設立に参加し尽力した。

郷里からの強い要請で、12月末をもって慶應義塾を退学して、哲学館へ転入学した。慶應義塾で立ち上げた英文会が機能なくなり、25年4月8日、能海は新たに「釈尊降誕会」の組織に尽力した。哲学館では、井上円了の下で宗教学を学び、在学中に、「純正哲学自解」を記述する。26年7月、哲学館卒業後に、『世界に於ける佛教徒』を哲学書院から自費出版をなしチベット探検の必要を訴えた。

明治27年1月3日、能海寛は、自坊(浄蓮寺)において、チベット探検に赴くに当たって、「口代」という遺書をしたため、万一に備え自髪を添えた。「予は、全く名利の為にあらず。愛国護法の精神よりして、この決心をなす。由て、一つは国家の為に、一つは、仏法の為なり。この二大義務は成年にあらずしては、容易に成し得られず。由て、通じて国の為、法の為に為す。予の一生中の業は、只、この一事にして、その後に於けるは、一地方、一区域に限る国の為、法の為に尽力致す考えなり。」と目的と将来の希望を述べている。「又一つは、この浄蓮寺の一大歴史に残るべき事越をなし、後来、当山の住職となる者の為に、この業を企てるなり。」と目的を延べ、「予の、この度の業に着手以来、その有様おば郵報に可致候間。それにて御承知下されたく、又郵状の出せざる地に入り込み候節は、詮方、これ無く候間。予の写真をば当寺に残し置き候間。夫れにて、予の健康を瘳りたまひ帰山の日を御待ち下されたく候。」と自分の写真を残しておくから、留守中の安否を祈ってほしいと記述している。この写真とは、半年後に神戸で、兄弟3人(法言、寛、斉入)で撮った写真のことである。



『能海寛遺稿』



「活眼」



左から法言、寛、斉入

27年夏に、チベット行きを望むも、日清戦争の勃発でやむなく中断した。28年、郷里で、波佐倶楽部を組織し、世界地誌を学ぶ国際化教育を行い、益田市沖の離島・高島で、寺子屋教育など行った。

29年3月、南條博士の誘いで、再び上京し博士宅に寄留して、サンスクリット語、中国語など語学に勤しんだ。本山へチベット派遣僧として支援の嘆願書を提出し、チベット行きの許可を待った。31年6月に、佐々木静子と結婚して、郷里で新婚生活を送ること4カ月目に。本山から、チベット行き支援の許可が下りた。

31年10月4日、寛は、郷里の人達に見送られて、浄蓮寺を出発、県境で愛妻に見送られチベットへと旅立った。同年11月16日、中国・上海に上陸し、2年半の間に、12,000Kmの距離を踏破して、巡礼探検をなす。業績として、経典・仏具・拓本の蒐集、仏典の翻訳、歴史・地誌・民俗などの紀行文を数多く残す。巡礼探検は、3回に及んだが、特に第一回探検は、ダルツェンド(康定市)から巴塘に向かう探検に、本山からの要請で、寺本婉雅と行動を共にした。二人は、運命共同体として、進蔵するも、幾多の難関が待ち構えていた。旅先で、天幕で野営中に盗賊に金品や馬を盗まれるなど苦難が続いた。能海は、蕃犬に9か所も噛みつかれ寺本の看護を受け急場をしのいだ。

寺本婉雅との生死を掛けた探検行に友人以上の絆を得た。第一回探検で、巴塘から引き返し、ダルツェンドまで帰った二人は、今後、各々のルートを模索しポタラ宮をめざすこととして、能海はダルツェンドに滞在して、第二次探検を目指すこととし、寺本は一旦日本へ帰り、再起を期すことで、能海に見送られて帰国した。

このように、寺本が兄と慕った気持ちが、能海の横死によって、自分の事のように、能海の代わりに中国大陸から能海が本国宛てに届けた、本山宛て上申報告書、友人、知人当に届けた書簡を中心に『能海寛遺稿』を17回忌に間に合うよう、渾身を捧げて、出版に取り組んだ。以下、横死情報、17回忌法要を交えて、弟水野斉入宛てに届いている書簡を元に、『能海寛遺稿』出版の経緯を追ってみたい。

横死情報が届く

能海は、旅行中に、西藏行の感念を著すものとして、「東洋の秘密文庫。世間未知の図書館と望みを属せらるる西藏国前後蔵より薩迦の経蔵には我々の求めて止まざる東洋学の古本を秘蔵し居るも不計。今迄は友人に西藏行を望み居りしも、今や東洋問題、特に中央亜細亜問題、年々通過し来る。我は不要多銭単奇旅行せんと。自ら企てたり。屑々と延引せば、却って外国の為に先をとられんと恐れたり。」「思想の変遷」より

西藏学の必要を述べた文章は、「西藏漠遊の途に上りて段々と土人等に遮られて。暫時、巴塘及び打箭炉に滞在。少々西藏経文を得て研究せし処、京外にも、其訳文の我々平生望み居る梵語原文に近きより、今は、英文よりも梵学よりも即ち、西藏文研究の愈々必要なるを感ずるに至れり。」「思想の変遷」より

能海寛は、明治34年(1901)4月21日付、中国・雲南省鄧川から愛妻静子への書簡を最後に総ての音信を絶ってしまった。静子は、10年間、ずっと寛の帰国を信じて待ちわびていた。こうした中、明治36年(1903)12月に静子の夢枕に寛が罪人の姿で捕らえられている姿を夢に見て、不安に駆られた。両親、親戚も静子の気持ちを察して、翌37年7月に静子を上京させ、南條博士や友人を訪ね、消息を尋ねた。この時の様子を子安善義は、「偶ま南條先生の御宅を訪ふ、一婦人あり、私は能海寛の妻ですが、夫の音信は分りますまいかとの事に、先生も能海君の細君と聞きて驚き給ひ、小僧(子安)も驚けり。」と、その時の情景を述べている。

明治37年(1904)9月28日付、南條博士から能海謙信宛に書簡が届いた。これによると、春谷登氏が

先月ハワイ別院に向けて布教活動のため渡航した旨を伝えている。「能海寛君の事は常に心に然り居り候」、「明後 30 日には黄檗宗の僧河口慧海氏再び入蔵の為、東京を出立 10 月 11 日神戸にて八幡丸（船名）に乗込みの由に付、寛君の事を搜索を致し呉度頼み入れ置候」と、伝えている。静子が上京した理由は義弟の春谷登の渡航見送りのこともあり、親族代表として見送りも兼ねていたものとも思われる。

寛の安否を気遣っている郷里の浄蓮寺家族や友人の元へ、明治 38 年(1905)6 月 24 日付、同郷の岡田利喜太が従軍先で知りえた情報として、同郷の小林久太郎宛に軍事郵便で能海寛の横死情報を届けた。

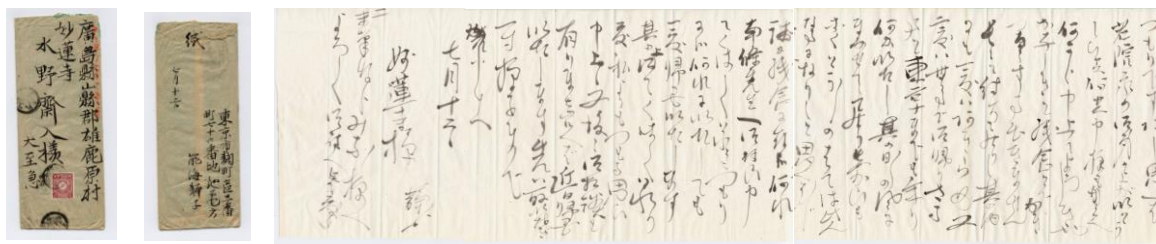
「(前文略) 号外 能海豊(寛)氏は、生死不明ノ為メ御互ニ気遣ヒ居リ候処、当地ノ在勤の軍務署長井戸川少佐殿ハ数年前ヨリ(チベット)地方ヲ巡回セラレタル人ニ付問合見候処折角其の豊(寛)氏の事ナレバ私ニ委細知リ得タリ。能海豊(寛)氏ハチベット界ニ於テ土人ノ為メセツガイサレ死去セラレタリ。自分ハ昨年 1 月チベットヨリ帰リ掛ケ丁度豊(寛)氏ノ死去セラレタル家ニ宿リシニ大日本帝国島根縣石見国那賀郡波佐村出身能海豊(寛)ト記シカベニ歌ヲ書キノ残シ有シ其ノ歌ノ意味ハ残念ナガラ此所ニシテ土人ノ為メセツガイセラレルトノ意味ナリ。依テ其ノ土地ノ土人ニ就テハ尋子見タル処、一昨 36 年 12 月中旬ニセツガイセラレタト相違ナキ由ニテ自分モ驚入其ノ歌ヲ自分ノ手帳ニ記シ保存致シ居リ候処分(紛)失シ残念ナリ。尤モ、其ノ田(他)ハ直シ本国へ歌モ記シ詳細書面ヲ差出シ候ガ届カサリシヤトノ咄シナリ。尤モ、私ヨリ井戸川氏へ直接ニ面談スル事ニ至ラズニ付過日モ御報申上候通り当旅団付従軍僧トシテ濱田町(現・浜田市真光町)真光寺就職大原義謙氏ハ再度面談セラレルニ依リ、全氏へ依我シタレバ直ニ問合セシコト候処、右ノ次第ナリ。實ニ残念千萬ノ事ニ有シ候トキ尚委シキ事ハ近々私シ方、井戸川少佐殿ニ面談シ御報申上候得共、死去セラレタル事ハ確ナル事實ニ有シ候間、可然御取計イニ下度候。私シヨリ浄蓮寺方へハ羽書(葉書)ニテ只豊(寛)氏ハ死去セラレタル由タシカナル筋ヨリ聞タル旨ヲ記シ悔候文ヲ加ヘテ発送致シ候へ共、土人ノ為メセツガイセラレタル噂ノ事ハ申送ラズ候。其ノ様御推リノ上御取計イ発表シ下度候。」

明治 38 年(1905)7 月 7 日に小林久太郎あて第一報が届いた。これを受けて、7 月 9 日付で、浄蓮寺では早速、父の謙信師が、岡田利喜太の書簡の写しを添えて、南條博士のもとへ「(前文略) 西藏探検の為出発仕居候處、拙者事非常に老衰、法務難運、困入候に付き、日夜相得受居候。案外其筋より正實之通信、別紙写之通り即今到着仕り、驚入愁傷に沈居候、其由不取敢御通信申上候」と伝えた。

明治 38 年 7 月には、静子夫人は既に、東京に寄留中であつたので、寛の横死情報は、南條博士から静子へ伝えられた。この様子が、7 月 12 日付、静子夫人から妙蓮寺へ贈られた書簡には、電報で、南條博士に知らせたことが、静子にも直ぐに伝えられた内容と、「一旦、帰国致します」と記されている。

南條博士は、早速関係者やマスコミに情報を公開した。明治 38 年 7 月 25 日発行の「東京朝日新聞」ほか諸新聞は競って故人の伝記を掲載し、勇壮なる旅行の様子を伝え、当時の人々に感動を与えた。

報道記事を見た井戸川辰三から岡田利喜太宛てに横死否定の書簡(明治 38 年 8 月 4 日付)が送られてきた。その頃、反省会雑誌主幹の桜井義肇は、友人の松島宗衛(北京、順天時報社)へ書簡を送り、横死情報の調査を依頼した。明治 38 年 8 月 12 日付、松島宗衛から能海寛の横死情報の真相を井戸川に照会



明治 38 年 7 月 13 日、能海静子⇒水野斉入宛て書簡



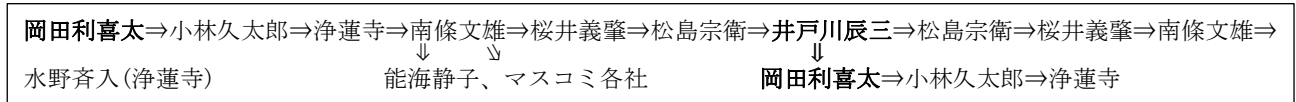
した結果、誤報である旨の書簡を受け、反省会雑誌の桜井義肇へ転送した。明治 38 年 8 月、井戸川辰三から北京順天時報の松島宗衛宛の軍事郵便の書簡内容を要約すると、友人能海寛師の事に付き問い合わせについて回答の形で書面を認め送付している。その内容は、

「(前文略) 岡田氏の又聞きとなり之に、36 年 12 月 20 日 (小生大理に赴きたるは 36 年 5、6 月頃なり) とか又は石見国波佐……とか、色々のヒレヲ付ケ而シテ小生の談話の様ニして、其を親に違伝せられたるが、この度の訛傳の原因と相成如し事と存候。(以下略)」

松島氏はその書簡と封筒を同封して、8 月 12 日付けで東京本郷区東片町 120 番地の桜井義肇氏 (『反省雑誌』主幹) に送付し、ご一覽の上ご判断をとしている。

桜井から南條博士へすぐさま知らせが届いた。8 月 24 日付け南條博士から水野斉入宛に詳細な文面が届いた。

明治 38 年(1905 年)8 月 18 日付で、謙信師は、南條博士宛に次の文面を送った。「(前文略) 井戸川氏の回答に接し候へば、横死之事件全く訛傳憶説との説、愁慮忽ち変じて安慰、驚喜相催候。帰国の時期、期待受申居候次第に御座候。此段敬白化候。」と、横死の報せが訛伝であったことでの最悪の状況から脱した安堵感を率直に述べ伝えている。



一方、郷里の小林久太郎宛に従軍先の岡田利喜太から井戸川辰三からの訛伝である旨の書簡を同封して来た。井戸川は、7 月 26 日付の「時事新聞」を見て岡田利喜太へ訛傳臆説であると書簡で述べている。

井戸川少佐と行動を共にした、原田鐵の『能海寛遺稿』247P に掲載されている文面によると能海と初めての出会いは東京の詠帰舎で中国語を習うとき、2 回目は、31 年冬四川省で再開、3 回目は、32 年 6 月ダルツェンドで、4 回目は、33 年 11 月 4 日、土民の迫害にあい、ラマ僧姿で四川にたどり着き、3 か月静養した。34 年 2 月更に雲南を目指して出発したのが最後の別れとなった。そのとき計画が失敗すれば「更にインド方面から道を求めん」と笑って答えたという。36 年夏雲南に遊び大理府を過ぎ、一夜客舎に投じ、その破壁の間に我国風一首を見出し、紙を伸ばしてすき写して持ち帰った。このことが貴紙上の記事「36 年 12 月」訛伝に非ざる乎。

※ 36 年夏は、井戸川氏も同伴？建築家の伊藤忠太博士の一行の雲南での行動も併せて検証し直すことが必要である。

浅草本願寺で追悼法会

明治 38 年 7 月 26 日午後 3 時、浅草本願寺にて故能海寛の追弔法会を催し、南條博士が導師を勤め、南條博士が渡清以来の経過を報告、能海寛が重慶より博士の元へ送付した西藏経文、小塔、鈴などを陳列し博士が説明を加えた。未亡人静子も参列し香を手向けた。哲学館大学長井上円了は弔辞の中で、次

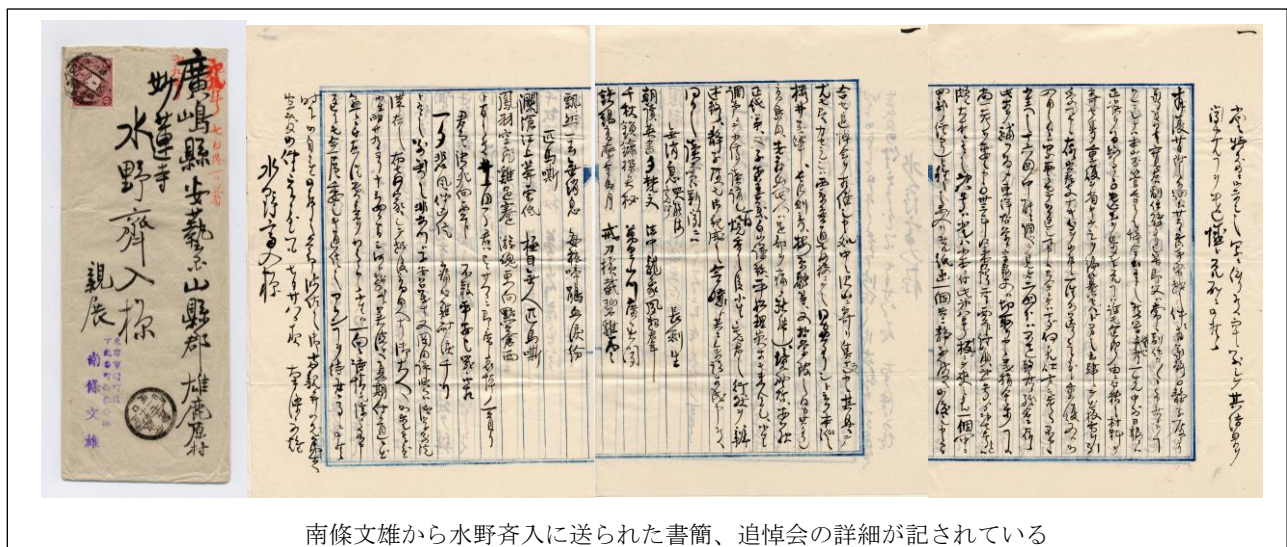
の漢詩を即席で哀悼の一首を贈った。

君曾決死向西蔵
不報平安已幾霜
一夕悲風傳凶信
痛心難禁淚手行

参列者は、普通教校の同志、桜井義肇、長沢則彦、梅原融。哲学館の同志、高島大円、安藤弘、境野哲海、安藤正純。子安善義、白山謙致、平松理英等友人が多数来会し香を手向けた。

散会后、生死について諸説ある中で、井戸川辰三（少佐）の新聞報道（訛伝説）を尊重することとなった。

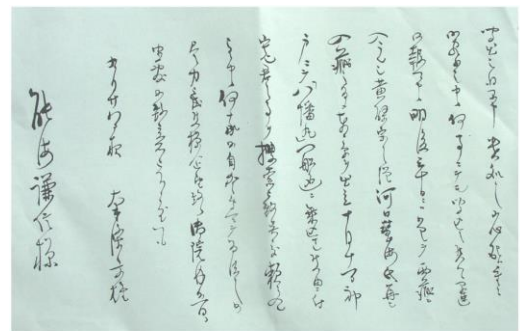
浄蓮寺から、能海寛の命日を愛妻静子に届いた書簡の日付(明治34年4月21日)を以て、決定してほしいと上申中であったが、本山から能海寛の命日は、南條博士宛ての最後の日付である明治34年4月18日を以て、寛の命日と決定された。



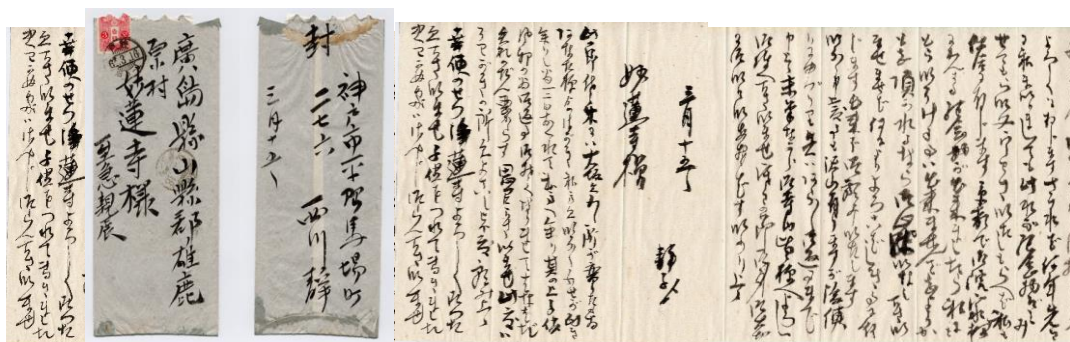
南條文雄から水野齊入に送られた書簡、追悼会の詳細が記されている

能海静子は、明治42年に西川氏と再婚して、神戸に在住していた。水野から静子に寛師の写真の手持ちの有無の問い合わせに対する返事を妙蓮寺に宛てた書簡で、「寛院家様の写真は、川口(河口)様に御渡し申せし様、」と南條博士に3枚、預けて消息探索を頼んだと記している。

南條博士から 能海謙信宛書簡によると、河口慧海へ2度目の西藏探検行(38年10月11日出発)に寛の写真を2枚手渡して探索を依頼した旨を伝えてきた。



南條博士⇒能海謙信宛書簡(河口慧海氏へ2度目の西藏探検行に寛の探索を依頼した旨を伝える書簡)



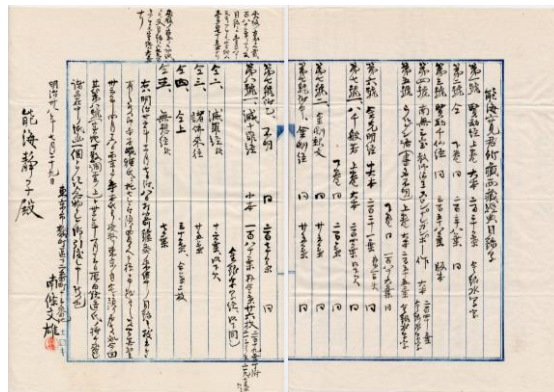
西川静 ⇒ 水野齊入 大正6年3月15日

能海寛の将来品

能海寛の将来品は、中国大陸から、南條博士宛てに全てを送り届けている。明治32年11月7日、寺本婉雅に托した物は、明治33年4月17日、京都にて、南條博士に手渡され、南條博士宅へ保管中のもの。明治33年1月13日、原田鉄造に托したものは、南條博士宅へ届けられた。南條博士は、能海の母校哲学館、東本願寺の大谷大学、浄蓮寺の3箇所へ内容を鑑みて、振り分けられた。

明治38年7月12日、南條博士から水野斉入宛て書簡によると、「西藏經典は、小生方に預かり置候は、真宗大学又は哲学館へ記念して寄付致し候様致したく候。」と知らせている。

浄蓮寺あての将来品は、明治38年7月29日付、南條博士から上京中の能海静子宛てに遺品の受渡し經典目録写によって知ることができる。「上海の櫃」に納められたものも一括浄蓮寺に送り届けられた。これら3箇所へ分配したのは、明治38年7月26日に執行された追弔法会を以て能海の遺品として、分配が行われた。



南條博士から能海静子へ渡された經典目録

十七回忌法会（大正6年）

浄蓮寺本堂は、慶長2年(1598)に営造され、72年後の、寛文10年(1670)に改築、以来242年経過の木造、茅葺きの寺院であった。このため、能海寛は、旅立つ前に書き残した、「天頂山ニュービルディング」構想に基づき、総代長の石田喜三郎が浄蓮寺の新築を目指して、改築委員会を設置し、大正元年から5か年計画で檀家・地区民からの浄財によって進められた。大正元年から、総工費5,000円の予算で木寄せが始まり、改築が進む中、能海寛の17回忌法要も近づき、大正6年の春には、是非とも完成させたいと考えていた。

建築工事が進む中、浄蓮寺と真宗大谷大学で、寛師の誕生日を以て、「17回忌」追悼法会を執り行うことが計画された。

大正6年(1917年)1月20日付、寺本婉雅から水野斉入宛書簡によると「故能海寛君生死不明本年早や17回忌に相当候間、小生等南條博士と協議發起人として来5月18日故人の誕生日を以て……」と、真宗大谷大学において、記念法会、講演会、故人の遺物を出版することを知らせている。追伸において、故人の遺物行李、支那の衣服、書籍、携帯品等全て写真に撮影して至急御送されたい旨記載している。このように、京都でも、能海の17回忌記念法会と記念講演会を計画していることが、報告された。

2月9日付、大谷大学在学中の能海法恵から水野斉入宛て書簡で、「予て1月の宗報、2月6日の中外日報、2月5日の大阪朝日京都付録等にも出ており、寺本婉雅氏より照会せられし事とて十分御承知之通り、寛叔父様の消息絶えてより、今年が丁度7年目に当たることとて南條、高楠、藤岡博士並びに本山役員、大中学教授等の方々によりて誕生日なる5月18日をして、当大学に於いて追憶会を勤め尚、講演会、遺物展覧会等を催さるる筈に御座候。又記念として遺稿出版せらるる事に、今その準備中にある事は言わずとも御承知の事と存じ候。」「当大学の学長南條先生の発起にて、この大学にて催される事なれば、猶一層嬉しく感じ居候。寺本先生よりお前にも手伝いをして呉れと申され候間。報恩の為、出来る限り力を尽くして手伝するつもりに候。」と追憶会のいきさつを伝えている。

3月15日付、能海法恵から水野斉入宛て書簡によると、「峨眉山へ登られし時、身には喇嘛僧服を着し立ち左右に従僕と通訳兼語学教師とをつれたる三人連写の写真は、浄蓮寺から送付願ひ寺本先生へ早速持参渡し申すべく候」と叔父(水野)へ報告の形で記述されている。

大正6年5月1日に新築完成されたばかりの浄蓮寺本堂で執行された「17回忌追悼法会」には、寺本婉雅が京都を4月27日に出発して、28日、可部で一泊、29日夕、浄蓮寺に到着。5月1日に記念講演(中2席)を行った。このことは、寺本の書簡(3月14日付、水野斉入宛て)にも、講演についての日程の希望の詳細が記されている。

真宗大谷大学追憶会主催の17回忌記念法会・記念講演会は、当初は、寛の誕生日に開催と予定していたが、5月6日に決定(2月26日付、寺本⇒水野あて葉書)したと計画を進めていた真宗大谷大学追憶会主催の17回忌記念法会・記念講演会は、南條博士の満州での巡回の都合によって、5月20日に延期(4月27日付、寺本⇒水野あて葉書)となった。

5月15日付、寺本婉雅から水野斉入宛て書簡に、「故人追憶会記念法会併記念講演会期日も遂に近付き候間、講師は東京より河口慧海連枝を仰ぎ候て、総入費も900円に上り候次第。なにとぞ、今日御上京相成度待入候。遺稿10部貴地着致し候哉。御返事でできれば候。」と報告に併せて、記念法会への案内を記している。浄蓮寺分50部とは別に、妙蓮寺へも10部の販売を要請した。

そして、5月20日に開催された17回忌追悼法会には、浄蓮寺を代表して、水野斉入、能海法恵が参列した。追悼法会、記念講演、遺品展覧会がしめやかに開催された。



大正6年5月20日、大谷大学で能海寛追悼会が開かれた。
前列左から能海法恵、水野斉入、南條文雄、河口慧海。
後列左から2人目が寺本婉雅。河口慧海が講演を行った。



能海寛の将来品の一部

『能海寛遺稿』(大正6年)の出版

『能海寛遺稿』の出版発起人は、南條文雄、月見了念、関根、白山謙致、子安善義、藤岡了淳、寺本婉雅の各氏賛助員として、帝国大学、真宗大学の博士、教員が名を連ねた。

「亡き友能海寛を悼む」と題して寺本婉雅が次のように寄稿している。

巨眼豊頬の容貌、豪邁不羈の気象、堅忍不拔の決意を抱いて遠大の目的を企画せられた能海君を追懷默想せば、髣髴として嚴容を眼のあたり見る如くである。(中間略)

西蔵探検の同伴者として、眠食を俱にせし余の瓦全存命せるに、君や独り亡くし。回顧せば明治32年6月29日、西蔵第一関門ダルツェンドに至り始めて君と邂逅した。吾らは一見旧知の如く、肝膽相照らして互いに同志を喜び、生死を一にせんことを誓約した。行雲流水、峨々たる雪山幽谷

を跋涉し、野に寝ね、山に伏し、蛮人の白刃をくぐり、蛮狗の襲害を蒙り、念々称名、歩々生死を色味しつつ、32年8月11日、第三関門巴塘に到着した。

本年は君が生死不明以来十七年から相当するからそを祈念せん為め、君の追悼法要を営み、その遺稿を編纂し、故人に関係深き人々の序文、書翰、感想をも併せ、尚江湖知名の士の賛助を得て、この能海寛遺稿を刊行したのである。若しこの因縁に由て、君が犠牲的先駆開拓の功を世に紹介するを得ばまことに結構である。ここに、余はこの遺稿上梓に就いて多大の賛助を垂れ給いし諸士に対し、亡き友に代りて深甚の謝意を表し奉ります。

願くは、この一稿汎く世に流布して勇猛なりし求法僧としての亡き友が永久の碑銘たらしめよ。

大正6年3月28日

京都真宗大谷大学に於いて

寺本婉雅識

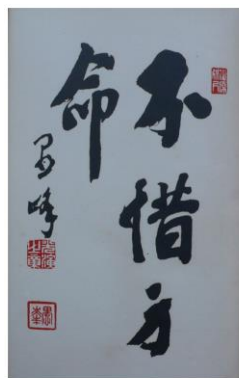
折しも、大谷法主（光演上人）より「不惜身命」の書を下付され、『能海寛遺稿』に写真版で収載された。『能海寛遺稿』の表紙デザインは、「装丁は、頗る衣装を凝らし福田眉仙画伯（小生の知人）は故人跋涉の打箭鑪以西迄旅行せられ因縁に依り特に揮毫を願はし候処、支那僧服を被て馬上悠々にして単騎大雪山を越えんとし、その下方に西藏式の家屋、高山の植物を上方に大雪の陰山を表し三色版にて頗る勇壮の真景に御座候。上部には故人の絵紋を標し候。などをの意匠によるものです。」と寺本婉雅の書簡（大正6年3月6日付水野斉入あて書簡）で記述している。

寺本は、どうしても、寛の故郷、浄蓮寺で執行される「17回忌法会（5月1日）」に『能海寛遺稿』が間に合わせたかったのである。

「17回忌」を記念して、出版された『能海寛遺稿』は約550円の総経費が掛かったこと。追悼法要などに350円程度の入費を要した事などが判る。遺稿集出版には、南條博士が80円、本山支出100円、残金は出版物の販売と寺本婉雅の負担で賄うとしている。浄蓮寺側には50冊程度の販売を割当てていた。中でも、天皇家への献本や島根県知事への寄贈もおこなわれたことが、これらの書簡で判明した。



能海寛将来品「西藏經典など」現在は、大谷大学博物館に所蔵されている。



大谷法主（光演上人）より「不惜身命」の書を下付される



明治32年3月22日・重慶領事館

昭和25年（1950年）9月29日付、大谷大学藤岡了淳学長より、浄蓮寺住職宛の書簡を要約すると、「近日能海寛師50回忌法要勤修あるに付き、去、大正6年（1917年）に17回忌法要を営む際に主幹の立場の関係で、南條学長、寺本教授と相謀り法要の開催、能海寛遺稿の刊行を計画、寺本氏と編集に携わり、能海師略伝原稿が自分の手許に現存しており、昨日、文庫を捜し、幸いにも見つかったため、御因縁ある貴寺へ拝送すべきが自然と存じ、貴寺で追憶資料として保存されたい。」と綴られ、「寛師支那内地より南條師宛寄贈されたる西藏經典等は南條師より、更に本学図書館に転贈され、尔後、本学書庫にて研究貴重資料として保候。」とし、二白、として、「略伝原稿4葉は、南條師の直筆である。」と記されている。そして、浄蓮寺では、寛の50回忌がしめやかに執行された。



南條文雄の直筆「略伝原稿」

戸籍削除

その後、能海寛の誕生日から 100 年経過後の昭和 44 年 10 月 20 日付の許可を得て、10 月 22 日に、「年月日時分不詳死亡」として、戸籍から削除された。

これを以って横死情報が解決した訳ではなく、多くの謎を秘めたまま 21 世紀に課題を持ち越したのである。

『能海寛遺稿』の出版は、能海研究には必要不可欠の書籍であり、当時、研究者が容易に入手出来なかった為、東京の五月書房さんに依頼して、復刻版の発刊を打診、原本保管の大谷大学図書館を紹介して、復刻に至った。

その後、能海寛研究会編さんの『能海寛著作集』全 15 巻 17 冊・別巻(索引)1 冊が刊行され、『能海寛遺稿』と併用することによって、能海寛の研究がより一層深まっていくと思われる。

『能海寛遺稿』の出版経緯をたどる中で、寛の生前中の生き様、即ち対人関係において南條文雄、井上円了、石川舜台、寺本婉雅、藤岡了淳、高楠順次郎、子安善義、白山謙致など能海寛の探検行を心から支持していた人たちによって、十七回忌に合わせて発刊されたのである。

昭和 57 年 6 月 6 日、地区民が一致団結して、寛師の業績を讃え、近隣町村からの多くの浄財によって、浄蓮寺境内に大佐山を背景に顕彰碑が完成した。そして、生誕 150 年を迎えたのである。



能海寛師顕彰碑 昭和 57 年 6 月 6 日建立

【使用文献】

浄蓮寺蔵写真。『能海寛遺稿』（大正 6 年刊）。

『能海寛著作集』（全 15 巻 17 冊、別巻 1 冊・平成 22 年刊）。

妙蓮寺蔵写真、「水野斉入あて書簡」。

浜田市金城歴史民俗資料館寄託収蔵品(能海寛歴史資料)。